

エジプト駐在武官

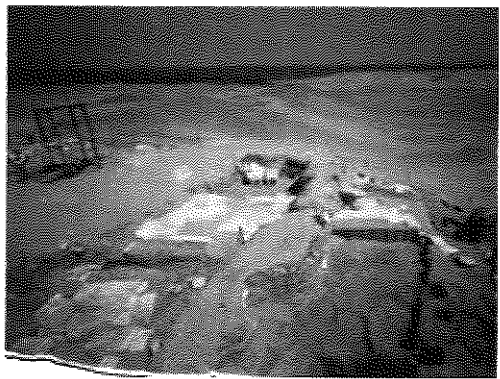
日誌(10)

ユダヤ教徒最期の砦

マサダ・死海にて

榊枝 宗男 陸自75

マサダは、死海のほとりにそびえる天然の山を利用したユダヤ人最期の砦の遺跡である。中東地誌資料収集のため、エジプトからヨルダンへ渡り陸路国境を越え、イスラエルの入国検問所を通過しようとした時のことだ。20



マサダの砦 筆者撮影

歳位の若い女性兵士がトランクスーツケースを全部開けるよう指示した。

エジプトの日本大使館員であること、またウィーン条約で保証された外交特権として手荷物検査は免除されることを説明したが、若い兵士は毅然と「あなたの外交官としての身分を保証することよりも、イスラエルは自国の安全保障の確保を優先する」と譲らない。こちらも外交特権への侵害の前例を認めるわけにもいかず、1時間ほど説得していると、将校が現れ質問形式に切り替えると言った。

ようやく乗り合いタクシーを使い、死海を見下ろすマサダのロープウェイ乗り場に到着した。ここから一気に標高400mのマサダの砦の上まで登つ

た。紀元70年にローマはエルサレムを占領し、ユダヤ人の殲滅作戦を行った。このマサダの要塞にはエルサレムから逃れた女性や子供たちを含む約千人が立てこもり、数で圧倒するローマ軍を相手に、3年にわたる籠城作戦を戦った。

険しい地形の利があつたとはいへ、すさまじい戦意である。ついに迫り来るローマ軍への防衛戦闘が限界に達して967名のユダヤ人は自決の道を選び、これ以降1948年のイスラエル建国まで、約2千年の間、多くのユダヤ人たちは世界に散り「離散・流浪の民」となつたのである。

このマサダで毎年、イスラエル国防軍へ入隊する兵士の宣誓式が行われている。彼らの宣誓文は「マサダは二度と繰り返さない」の一言であるという。

前述の国境兵士の張りつめた警戒心は、ここから来るものとようやく理解できた。他方、イスラエルとは対照的な戦後の日本は、安全と水はタダと考へるくらいに、安全保障や危機管理に關して世界に類をみないほど恵まれた時代を過ごししてきた。恵まれた時代が長く続けば、その恩恵を忘れてしまうのは、無理もないことだろう。

この中東では、国家のみならず個人のレベルでも、安全保障が最優先課題と認識されている。ユダヤの亡国の民が長く悲しい離散の旅の後、ようやく

安住の国土を勝ち取った喜びを、死海の畔を眺めながらマサダの砦で暫し黙考した。